プロローグ

本論が感化を受けた碩学と作家は以下の通りである。ジョージ・レイコフとレイ・ジャッケンドフは本論を認知言語学への入境に方向付けた。認知言語学は、意味を多様な力学に翻弄される暫定的且つ変動的磁場として理解する本論を根幹において支える。意味とは自己同一性への叶わぬ期待である。その期待が近代において国語辞典を誕生普及させたロイ・ハリスは言う (*The Language-Makers*)。ウォルター・オンクは、声と文字の物理学的宿命や技術的性能による意味生成への関与に目覚めさせた。本論がしばしば言及する「ノイズ」や「インクの痕跡」という概念はオンクに拠る。

実際に発音される音声であれ、頭のなかで発音される音声であれ、そうした音声となったことばを指し示す合図として、意識をもった人間によって直接的ないし間接的に用いられないかぎり、書かれたものは、表面のうへの目印以上のものではありえない。 『声の文化と文字の文化』一六〇)

It is impossible for script to be more than marks on a surface unless it is used by a conscious human being as a cue to

言葉が脳内における一時的現象であるという認識が本論を補強する。オングは文学体験をインクや書物という物質の体験に拡張する契機を与えた。視覚詩や具体詩、あるいはアセミック・ライティングは文学とアートとの境界を曖昧化する。

石川九楊はオングの想定する言語形態の段階説——声、手書き、印刷、そして電子化への連続的展開——が気に入らないようである。石川はオングの議論を批判する。

発音記号や速記記号や「文字」を使うことによって、「話された言葉」を発音記号化、「文字」記号化することができるという事実が文字論や言語論を歪めている。「……」「書かれた言葉」そのものである文字と、「話された言葉」である声の代替記号として用いられているにすぎぬ「文字」との本質的な区分ができず、外見上似ている、あるいは機能上異ならないという理由で両者を混用するところに、現在の「文字論」の蹉跌がある。〔筆蝕の構造〕二二六—二七

日本における文学と言葉の研究は、西洋の言語学を包摂することが原因となって混乱に陥った。石川は、近代日本の言語学がアルファベット音写文字言語のみを想定する西欧言語学の罫に落ちていると実情を分析する。文字は単に声の記録装置でもなければ声への誘導手段でもない。文字自体は目的となり得る。書家である石川の指摘は、日本における外国文学研究に対する教戒として傾聴に値する。この警告は第二章『コレクター』論に影響を及ぼした。

ケンダル・ウォルトンにとって、芸術の体験は幼児の「いっこ遊戯 (make-believe)」と同類である。キューピ

人形という合成樹脂が乳児を演じる。小説は男女の恋愛や兵士の武勇を報告する。小説やセルロイドという物は舞台の小道具として共同幻想を虚構する。声や文字も想像力の所産にすぎない。空気の振動が声を、平面上のインクの痕跡が文字を演じる。物理学的現象が言葉、ごっこに興じる。

カール・クラウスの言語論によると、言葉は単に伝達のための手段ではない、言葉はそれ自身が形態（ゲシュタルト）を形成するものとして主題化され得る。文字を書き文字を読むのではない。文字として書き文字として読む。文字という玩具との戯れもまた文学体験への入境条件である。

ジェラルド・ジュネットを超克しようとして躍起になった本論であるが、結局『物語のディスコース』、就中「語りの水準」への意識と依存を払拭することは困難であった。書物の物質性が個人の体験と社会構造にもたらす影響はロジェ・シャルチエから学んだ。あたかも物質としてそして技術としての書物を介さない直接的な情報授受が可能であるかのように想定することの誤謬を、構造主義物語論やテキスト論に見出した。シャルチエは言う

文学作品を研究する歴史家、文化的プラチック（文化的実際行動）と文化の配分状況を研究する歴史家は、以前にもまして、テキストを担う物質的形態が変わると意味も変わることが自覚している。

（『書物の秩序』一一）

それが手書きされたメモである場合と印刷された書物である場合、あるいは電子化されたデジタルデータである場合、それぞれのケースでテキストは異なった意味世界を創造する。清水徹による『書物について』は文字論と書物論を文学論に参入させる試論であり、本論の地平を文字と書物の物理的そして技術的要因からなる文学論に拓いた。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスの書物フェティシズムは、小説が小説である以前に書物であり文字であり物質であることを反映する。ボルヘスは盲目になった後も、書物が自身の傍らにあるという感覚に魅惑された。視覚を経由しない知覚は『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』の「目に見えない小説」を逆説的に創造した。

本論は当初学術研究として着想し書き始められた。推敲を重ねるにつれて、学術書や研究論文の確立された作法や硬直した流儀に対する心地の悪さに悩まされ、文学的エッセイに解放と安逸を求めた。アール・ブリュット、とりわけヘンリー・ダーガーは『非現実の王国』の不本意な公開によつて、異端であることの美学に本論を誘導した。クラウスは手垢の付着した常套句が空虚な記号に墮落することに注意喚起した上で、「誤った言語使用からさえ正しいものを作り上げることが、言語には本来可能である」(『カール・クラウス著作集7・8 言葉』二三)と強調する。慣習や規則への黙従や表面的遵守は文学論を空洞化させる。本論は研究論文が踏襲すべき約束の一部を意図的に冒している。文学研究書としてまとめ始めた本論であるが、書き進めるにつれて自身がMLAハンドブックに定められた研究論文の正統的作法から距離を保っていることを自覚した。逸脱——エッセイのより気ままな自由——が真実に肉薄する。文学研究の神棚に鎮座する批評家群の名前が本論のプロローグに不在であることにも異端性的一端が垣間見えよう。

二〇二三年二月二三日、神戸